

---

# **番外編 漆黒のシュガーレス ~熱血！地獄同盟会24時！！~**

スグル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

番外編 漆黒のシユガーレス ～熱血！地獄同盟会24時！！～

### 【Zコード】

Z9780E

### 【作者名】

スグル

### 【あらすじ】

2008年現在、連載中の作品、『漆黒のシユガーレス』の本編執筆にて、書いたはいいが、内容がアレだ、ストーリーの流れから削るべきと判断し、カットした没部分を再編集、加筆し、やまなし、おちなし、いみなしにし、掲載してみました。詳しくは、『漆黒のシユガーレス』より。

## チャプター1 「HENKYAKU ~返却~」（前書き）

内容にごきめましては、現在、連載中の本編『漆黒のシュガーレス』を御覧になつてから、お読み下さい。なお、御覧になつても、満足戴けない、それどころか、本編自体が満足戴けない場合があると思いますので、この場で謝罪をします。

## チャプター1 「HENKYAKU ～返却～」

秋羽隼の休日の朝。

自宅のアパートのチャイムが、宅配便のおじさんから鳴らし、その音で彼は目を覚ました。

遅くまで、職場仲間達と飲んだくれて、眠い目をこすりながら、下着姿で宅配物を受け取り、サインを書いて、おじさんを見送る。

「なんだよ…、つたぐ」

いい気分で眠っていたのにと、愚痴りながら、宅配物の小包みを送り主を見ずに、乱暴に開けた。

すると、中から、かなりの量の「チチチチ（正しい、名前が解らない…）」が入っており、厳重に包装されている物体が入っていた。

「まあか…」

さつきまで、一晩酔いと眠気にやられていた、隼の頭が一気に目覚め始めた。

重かつた皿蓋が軽くなり、大きく皿を見開いて、その包装を、バリバリと破った。

すると…。

「これはああああああ…」

隼は、周囲に迷惑を掛けほどの驚きの声を上げた。  
小包みの中にあったのは…。

その日の正午、何故、呼び出されたか解らない仮面のアルゼと、飯を奢ると言われて来たカタナと、二人を呼び出し、嬉しそうな笑顔を浮かべている隼の3人が、喫茶店のテーブルに腰を掛けている。喫茶店の前に駐輪された隼のZZ-Rには、彼のファンタジースーツのキーであるヘルメットが、ぶら下げられている。そして、椅子に腰掛ける彼は今、自分のファンタジースーツのポニー・ポニクを着衣している。

ポニー・ポニクは、一般人から見ても、普通のライダースーツと見た目が変わらないため、隼は普段、バイクに乗る際は普通に、このポニー・ポニクを着ていた。

「見て、驚くなよ！」

隼は、向かい合う席に座る二人の目に前に、今日の朝、届いた物をカバンから取り出し、テーブルに置いた。

それは、エビの頭をし、タキシードを着た怪人のフイギュアだった。

アルゼの顔が固まる。

「なんだ、それは？」

と、いつ飯を奢ってくれるんだと心待ちにしているカタナが、そのフイギュアについて聞いた。

すると、隼は笑いながら、

「はははーこれは、伝説の、旧エビフライ伯爵の幻のフイギュアだ！」

と、かなり嬉しいそうな顔をした。

アルゼ、カタナは、なんで、今日、隼に呼び出されたのかを理解した。

そう、彼は、これを自慢するためだけに一人を呼び出したのだ。アルゼは、鋭い目つきで、そのフィギュアを睨み付けた。

カタナは、腹が減ったと思った。

そんな二人に、お構いなしに、このフィギュアについて、隼は楽しそうに語る。

「いいか、エビフライ伯爵は、『山登り戦隊・ヤマレンジャー』での初登場以来、毎年、登場でお馴染みの敵キヤラだ！しかし、実は、ヤマレンジャーの前のシリーズ、『下着戦隊・ホットパンチャー』の39話に登場していたのだ！それが、この旧エビフライ伯爵だ！旧エビフライ伯爵は、マスクの造形が、エビよりも、どっちかと言ふと、アメリカンザリガニぽかったため、41話で降板になった悲劇の敵役！」

顔が微動だにしないアルゼと、適当に頷きながら、聞き流してい るカタナの二人に、隼は楽しそうに熱論。

実は、秋羽隼は熱狂的な特撮番組のファンだ。

「それ故に、フィギュアの生産が、すぐに中断となり、存在その物がなかつたことにされ、旧エビフライ伯爵のフィギュアは、幻のフィギュアとなり、ファンの間では殴り合いの奪い合いが起きてしまったほどのアイテムになつた！」

余談だが、特撮番組は、予想外のハプニングが多いらしく、そのためか、グッズに破格のプレミアがついてしまうことが多い。

隼が手に入れた旧エビフライ伯爵のフィギュアも、そんな所らしい。

「しかし、先日、ネットのオークションで、こいつを発見…出品者は、生活が苦しかつたらしく、この幻のフィギュアを涙を流して出した！値段は、10万もしたが、なんとか、手に入れてやったぜ…」

と、隼が自慢げに言い、カタナが驚いた。

「10万…こんな食べれもしないエビフライの人形に、そんな額を…」

10万もあれば、牛丼が、何杯食べると考えながら、カタナは隼に言う。

しかし、隼は得意げな顔に、不適な笑みを浮かべるだけだ。

カタナは、なんて金の使い方だと苦い顔をしつつ、自分の財布の中身が空なのを虚しく感じた。

すると、カタナはあることに気がつき…、

「しかし、そんな金、どこに…？安月給なのに、浪費ぐせが激しく、金と女に、ダラシナイお前が…」

「失礼だな、てめえ…」

と、無駄遣いの激しい隼が、どこから、そんな大金を出したのかを尋ねた。

すると、隼は…、

「実は、春日から、借りたんだよ」

と語り始めた。

カタナは、そういうことにして、今更ながらに気付いた。

すると、やつから、仮頂面のアルゼの口元が、少しだけ緩み始めた。

「いやー、あの眼鏡小僧のおかげで、ゲット出来ちまつたぜー。」

と、高笑いしながら、隼は言つ。

「しかし、あいつが、そんな大金を貸すか…」

ただでさえ、隼に大金を貸しており、それを、隼は返さないため、イライラしてるゼファーナが、そんな理由で貸すのと疑問に思う力タナが、そう言つと…、

「はははー！実は、あいつには、職場の阿部さんが、今度、結婚するから、その祝い金として貸してくれって、言つたら、ホイホイ、10万を貸してくれてよー！はははー！」

と、言つた瞬間…。

「…」

カタナが、なにかに気付いて、びっくりしたような表情を浮かべた。

アルゼは、口元を震わせて、笑いを堪えている。

さつきまで、楽しそうに熱論をしていた隼は、背後に強烈な負の念を感じたため、開いた口が塞がつた。

そして、隼は恐る恐る、負の念が放たれている後ろに、振り向く

…。

そこには…。

「あ…、き…、ば…、ね…、HA・YA・BU・SAアアア…」

クセッ毛の長めの髪の毛。黒い瞳が覗く、黒い縁の眼鏡。ちょっと、女の子みたいな端正な顔立ちの、パークーと白いズボンを着た線の細い、肌の白い少年が全身の血管を浮き上がらせて、隼の背後に居た。

彼の名前は、ゼファーナ・春日。16歳、フリーター。  
秋羽隼に、金を騙し取られた哀れな少年…。

ギヤース！…と叫びながら、その場から立ち上がり、逃げる隼。だが、ゼファーナは片手に握っていた、コダチを、隼の足元に投げつけ、動きを封じた。

「お金、返してください…。ていうか、阿部さんが結婚とか言つてましたけど、あの人、この界隈で有名な…、な人じゃないですか…」

シユガーレススースを着たゼファーナが、隼を外で正座させながら、金を返すように言った。カタナと、アルゼも、この場にいた。だが、旧えびふらい伯爵に全額を使った隼は、金なんか出せない。

「このバカは、貴様から借りた金を、このフィギュアに使った…」

と、アルゼが隼から取り上げた旧えびふらい伯爵のフィギュアを、ゼファーナの前に差し出した。

さすがに、温厚なことでもキレるだらうと思つてゐるアルゼで

あつた…。  
だが…。

「うそおー！」れ、幻の旧えびふらい伯爵のフイギュアじゃないか！  
！」

シユガーレスのマスクを外して、ゼファーナが興奮した。

「知つているのか！？貴様！！旧えびふらい伯爵を…」

急に、意氣投合した始めたゼファーナと、隼。  
アルゼは、ダメだ、こりやと頭を抱えた。カタナは、エビフライ  
が食べたくなった。  
しかし…、

「だからって、お金返しなきこと…！」

また、シユガーレスのマスクを被つて、キレたゼファーナであつ  
た。

果たして、秋羽隼が金を返してくれる口は来るのだろうか…。

## チャプター1 「HENKYAKU ～返却～」（後書き）

登場人物解説　・ゼファーナ春日・キャラは、同作者作品の『フリーナイン』のレビン・ハチ「と、富野アニメの主人公達とかをモデルに。レビンは、マルチブルに使えたキャラだつたんで、彼も動かしやすいキャラです。なにかと、受難の多いキャラですが、逆境の男になれるよう意識して書いてます。

## チャプター2 「若さ、若さってなんだ」（前書き）

登場人物解説・秋羽隼・ゼファーイナ、アルゼ、カタナの三人だけだと、なんかバラエティがないと思い生まれたキャラ。急遽、作つたため、キャラが上手く立てられず、出番が少ない。キャラは、『ゼイファーマン』の主役の翔助と、昔の少年マガジンの主人公達をモデルに。なんとか、上手く動かしたいキャラです。

## チャプター2 「若さ、若さってなんだ」

いつものように、藤岡剣友会の練習に、マネージャー役で参加しているゼファーナ春日。

スポーツドリンクの粉を開きながら、遠目で、竹刀を振っている雪乃を見つめていた。相変わらず、彼女はみんなと稽古に熱を入れていた。

そして、ゼファーナは、スポーツドリンクを作りながら、自分の首を抑え…、あの日のことを、ふと思い出す…。

あれは、スリーピングが本格的攻め始めた頃…。市内体育館の玄関にて、スリーピングのケリーホッパが、冬風カタナを騙すために現れ、ゼファーナの前に現れた時のこと…。

ケリーは、ゼファーナ春日が、シユガーレスの正体であるのを知らなかつたが、何故か、彼を初対面とは思えなかつた。

「えっと、カタナさんに、用ですね？少々、お待ち下さい」

と、ゼファーナはカタナを呼びに、道場に向かつて行つた。

そんな彼の後ろ姿を見て、ケリーは…、「あの眼鏡の彼、結構、かわいい顔してるわね…。わたしのタイプ…」

と、ゼファーナの顔を見て、クスッと笑つた。

そして、彼女は、ポケットに手を入れて、一枚の紙切れを出した。カタナの顔写真である。

敵である彼の前に、現れた彼女の狙いとは…。

「凄い美人さんでしたよ？」

「なんだと！？なんだって……！」

と、練習中のカタナを呼び止めて、ゼファーナは、そう言った。凄い美人というフレーズを聞いた瞬間、カタナは、大きく鼻息を出し、すさましい勢いで、防具を脱いで、一気呵成に、玄関に向かつて、飛んで行つた。

その姿を、ゼファーナは、あらら……と見つめていると……、

「春日くん……、どういうことかしら、これは……？」  
「はっ……！」

と背後から、防具と竹刀を持った雪乃が、すさましい殺氣を放つて、いるのに、ゼファーナは感じた。

その竹刀で、干物にされるかと思った……、と後に、彼は語る。

客間の和室の畳の上に、カタナと、ケリーが正座で座つており、その中にある和室の給湯室で、ゼファーナは、一人の分の茶の準備をして、いた。

客間の襖の間から、剣友会の面々が、防具を外して覗いているのを、ゼファーナは黙認し、気付いてないフリをした。とりあえず、雪乃が襖の間から、すさましい殺氣を放つて、いるのが、凄い気になつてはいた。

誰だか知らないが、美人なケリーを前にして、興奮気味のカタナは、

「ところで、お嬢さんは、どちらさんかな……」

と、声を1トーン低くした、いつもより、ダンディな感じの声で話す。

ゼファーナは、二人の前でお茶を出しながら、襖の間から、雪乃の無言の圧を感じていた。

すると…、

「はつ…！」

カタナは、驚いた。

いきなり、ケリーが涙を流し始めたのだ。  
お茶を出し終わつたゼファーナは、大きく、目を見開いて驚き、  
襖の間から、雪乃の驚きの声も聞こえた。  
すると、ケリーは、いきなり…。

ガバッ！！

なんと、カタナの胸元に抱きついた。

「えつ？えつ？」

さすがのカタナも、訳が解らず、思考がメチャクチャになつた。  
だが、先日、通販で購入した異性を引き寄せる魔法のフェロモン  
香水が、こんなに効果が出るとは…、とカタナは思った。  
ゼファーナは、驚きで口を開けながら、襖を見つめると…、

「雪乃さん、落ち着いて…！それ、危ないから、持たないで…！」

「なに、構えてるんですか！」

「うわ、目が据わってる…！！」

「姉ちゃん！眼が、抜刀斎みたいだよ…！」

と、襖の間から、なにやら、とんでもない状態になつている雪乃を実況するような小室、中田、尾崎、大樹達の声が聞こえた。なので、ゼファーナは、仕方なく、その場から出て行つた。すると、ケリーは…、

「逢いたかった…。やつぱり、記憶喪失は、本当なのね…」

と、言った。

カタナは、えっ！と声を漏らした。

襖の間からは…、

「所詮、この世は、弱肉強食…」

「なに、言つてるんですか！？ぬふう、首はやめて…首は…、くつ

…」

と、とんでもない事になつていてる雪乃と、止めに入つたら、なぜか、彼女に首を絞められたゼファーナの声がした。

そして、カタナの胸元で泣きながら、ケリーは…、

「忘れたの？わたしたち、結婚を誓つて、あんなに愛し合つたじゃない！」

と言つた。

カタナは、かなり驚いたらしく、声が出なかつた。  
襖の間からは、

「誰か、救急車を！」

「雪乃さん、気を失わないで…！」

「春日！春日！目を開いてくれ…！」

「姉ちゃん！姉ちゃん！」

と、ケリーのその言葉を聞いた雪乃が、ショックで氣を失つたらしく、全員が全員、取り乱す声がした。

ゼファーナは、後に、お花畠や、川が見えたと答えた。

それを思い出しながら、ゼファーナはため息を吐くと…。

「春日君！スポーツドリンク、まだなの！？」

あの首に締め付くような雪乃の声がして、背筋がピーンとした。まったく…、と言いながら、ゼファーナはスポーツドリンクを用意していると、ふと、桜花の顔が頭によぎった。

(桜花さんなら、きっと…、優しい感じで…)

.....

「ゼファーナ君…。ひどい傷ね…、見せて…」

と、体育館のロッカールームで、何故か、ナース服姿の桜花が、傷だらけのゼファーナの顔に片手で触れる。

体のラインを、はつきりと強調するかのような、彼女の白衣のナース服姿ゼファーナは、照れながら…、

「あつ、いや、大丈夫です…、これぐら…」

と、言つ。

しかし、桜花は、その柔らかい両手で、ゼファーナの顔を掴み…、

「遠慮しないの…。君は、年下の男の子なんだから、私みたいな、お姉さんの言つことは、素直に聞きなさい…」

と、彼女は自分の顔を、彼に近付けて、いつも以上に、色氣の混じった唇の動かした方で言つ。

ゼファーナは、顔を真っ赤にして…、

「はつ、はい…」

静かに、目をつぶつた…。

ゼファーナが、目をつぶつたのを確認するかのように、桜花が彼の顔に近づき…、そして…。

…………

「あつ…、桜花さん…。いけません！そんな、卑猥な…！」

スポーツドリンクが来るのが遅いので、雪乃と大樹が給湯室を行くと、そこには、妄想に浸るゼファーナの姿が…。

呆然と見つめる雪乃の手を握りながら、大樹は言つ。

「姉ちゃんが、こないだ、あんなに首絞めるから…」

このあと、現実に戻つたゼファーナに対して、雪乃が妙に優しかったと、大樹は後に語る。

## チャプター2 「若さ、若さってなんだ」（後書き）

登場人物解説 ・冬風力タナ：本来、この作品は彼が主人公でした。しかし、これだと、以前、自分の書いた作品と内容が被ると気付き、ゼファーーナをメインに。なので、ゼファーーナ以上に設定を多くしたため、メインになりやすいキャラ…。秋羽隼とは逆パターンです。今まで、書いたことのないキャラにしたいと思い出来たので、いろんな顔を持つていて、動かしやすいキャラです。

### チャプター3 「そして、発動した」（前書き）

登場人物解説　・夏海アルゼ：執筆前は、冷徹な美青年でしたが、意識したつもりはなかつたのに、某口ボットアニメの登場人物の人とモロ被つたことに気付き、冷静な女の子に（今でも、これで良かったのかと、本気で悩んでいる…）。それに合わせ、性格を『フリーナイン』の焼野原をイメージしました。だから、ジャージを着ています。自分の作品の女の子はヘタれる子が多いので、クール＆ビューティーな感じにしたかったのに、書いてるうちに、だんだん、ヘタってきて、いろいろと困るキャラクターです。

### チャプター3 「そして、発動した」

この日の市内のショッピングモールは、夏本番と言わんばかりに暑かった。太陽を、窓や建物が熱反射させ、この辺り一帯を、暑くさせる。

しかし、その暑さを、更に暑苦しくするかのよつて、ショッピングモールに内接する公園のベンチに、ある男が座っていた。それはそれは、すさまじいアフロだった。遠くから見ても、明らかに解るほどに、すさまじいアフロだった。

かつて、シルベスター・スタローン主演のロッキー・シリーズに出てきたライバルのアポロや、伝説の巨神が出てくるロボットアニメの主役を彷彿とさせるくらいの、すさまじいアフロ。

公園に居た少年達は、思わず、そのアフロに群がっていた。

そして、このアフロの男は、いつの時代の服だと突っ込みたくなるような、ジョン・トラボルタが来ていたような長袖の白い服を着ており、サングラスをしていた。肌は陽に焼けて、黒かった。

男は、少年達が群がるベンチに座りながら、いきなり、口を開いた。

「ファーリー、なんて、暑さだ…、ジャパンのサイタマシティーは…。かなり、暑いで…」

と、中途半端な英語混じりで、男は呟く。厚着のせいか、額から汗がこぼれていた。

一体、この男は何者なのか…。

少年達は、珍しいものを触るかのように、男のアフロに触つては逃げて行つた。

「なんて…、アフロなんだ…」

たまたま公園の近くを歩いていた、まだ傷の癒えていない絆創膏だけのゼファーナは、その男のアフロに驚きが隠せないで居た。絆創膏だけの口を半開きにして、驚きながら、公園の時計を見つめた。

それを見て、ゼファーナは、いかん！待ち合わせに遅れると焦りながら、驚くのやめて、また歩き始める。すごい、アフロだったと興奮しながら、ゼファーナは、その場を去る。

スペース・ランナウェーイ！

と、ゼファーナが去った後の公園のベンチに座る、アフロの男のポケットから、妙な音が聞こえた。

これは、どうやら、彼の携帯電話の着信音のようだ。

少年達が散った後のベンチで、男はポケットから、携帯電話を取り出して、耳に当てて、第一声…、

「アンチヒューマンズの、『セブテンバー・ミリア』だ…」

と、確かに、アンチヒューマンズといつ単語を言いながら、男は電話に出た。

果たして、彼の正体は…。

「その顔の傷、どうした…」

と、畠下がりに立ち食いそば屋で、カツ丼を食べているカタナか

ら、先日の件でついた顔の傷について、ゼファーナは聞かれた。

そのゼファーナの顔を見て、隼は冷やしたぬきうどんを食べながら、ガハハ笑いをして、

「女にでも、やられたか！？ハハハ！！」

と、ざるそばを食べているゼファーナに言つ。

すると…、

「なんで、解ったんですか…？」

と、ざるそばを啜りながら、ゼファーナは答えた。

カタナ、隼は、えつ！？と驚いた。

アルゼの引っ搔き傷は、生々しく跡を残している。

三人は、東京の新宿駅前に居た。

アルゼと映画見るのに失敗したゼファーナの地獄同盟会同士の親交を良くしよう作戦の引き続きで、カタナ、隼と、東京観光をしようとしているのだ。

様々なデパートが多い、新宿で、男三人で買い物でもして、楽しく食事でもしようと誘つたのだが…。

ゼファーナに、この一人をコントロールすることなんて出来なかつた。

「かんぱーい！！」

と、数人の女性たちに囲まれながら、カタナと隼は酒の入ったグラスを片手に、乾杯をした。

買い物するはずなのに、いつのまにか、歌舞伎町のキャバクラに

彼らは居た。

というより、あの二人が勝手に進路変更をした。

煌びやかな衣裳の女性たちに気分を良くしたカタナ、隼は、ガハハ笑いで酒を一氣のみしているのを、近くで、ジューースを片手に踞りながら、

「こんなはずじゃない…、こんなはずじゃなかつた…」

と、ゼファーーナは呟く。シユガーレスの入ったカバンを、足元に置いて、二人の酒ビンをくわえた一気飲みを見つめていた。  
いつもの着物姿のカタナに、アロハシャツの隼は、ジャンジャンと酒を飲んでいる。

気分良さそうに、女性たちと話している一人を見て、

(こんなときに、敵が現れたら、ビーすんだよ…。大体、カタナさんは、今、大変なことになつてたんぢゃないのか…)

と、ゼファーーナは一人、頭を抱えていた。  
すると、一人の女性が、ゼファーーナに近寄り…、

「あれー、眼鏡の君、なかなか、可愛い顔ねー。何歳なの?」

と、話し掛けてきた。

半袖のYシャツで真面目そうな感じのゼファーーナは、ここでは浮いていたせいか、返つて、目立ててしまった。  
女性慣れしていない彼は、戸惑いながら話す。

「えつ、16です…」

「きやー、カワイイー」

と女性は、ゼファーナに食い付いてきた。

こういふのは、初めてなのと、苦手なので、ゼファーナは困惑し、さらには、何故か、頭には、桜花の顔が浮かんできた。

視線を変えると、カタナと、隼は、周囲の女の子達と、山手線ゲームなどを始めていた。

なんだか、今は、自分は別世界に居るんじゃないかと頭が混乱して、きたゼファーナは、カバンを持って、トイレに行くといい、席から立つた。

「ハア…、まるで、別世界だよ…」

と、そのまま店から出たゼファーナは、店内のアルコール臭を肺から出そうと、大きく深呼吸をした。

先日と同じく、また作戦が失敗したと嘆きながら、夜になり暗くなつた歌舞伎町を恐る恐る歩いた。

周囲を見渡すと、サラリーマンや、恐そうな方々や、綺麗に化粧をした女性達が、街を歩いている。

この場所は、自分には合わないと思つたゼファーナは、逃げ出すように、ここから去る。

この場所から、去りながら、さつき、頭に浮かんだ桜花について、ゼファーナは考えていた。

(そういや、こないだ…、久しぶりに会つた…)

と、先日のバイトのことを思い出す。

そのときの彼女は、いつものように、どこか、彼女の雰囲気が変わつて、しばらく会わないうちに、何故か、しぶらくなつたのが気になつた。

それが、ゼファーナには、何故か、辛く感じた。

まさか、ダイゴとかと、なんかあつたんじゃないのかとの邪推が、頭の中を駆け巡る。

「あれ、春日は？」

と、酒でべロべロに酔い始めたカタナは居なくなつたゼファー  
ーに気付いた。

それで、女の子達に囲まれていてる隼に聞いた。

「知るか、んなガキ！んなことより、飲むぞ！」

と返してきた隼に、カタナの顔が青ざめてきた。  
そして……、

「なあ、おまえ、財布持つてるか？」

自分の懐をパンパンしながら、青ざめた顔のカタナが隼に聞く。  
隼の笑いが、止まつた。

「人は、まさか……、と思つた。

そう、二人とも、ゼファーに立て替えさせるために、財布なん  
て持つてきてない。

### チャプター3 「そして、発動した」（後書き）

本編ですら、見苦し性分でありますので、さりとて、見苦し番外編を御覧になつてもうござして、本当にあつがといひました。

## チャプター4 「光を求めるひと、痛いじつへ返しへへりつい…」（前書き）

2008年9月現在。この番外編は、すでに完結させましたが、現在連載中の本編が行き詰まり、しばらく、今後の展開を練り直すため、本編の連載を中断させることになったのと、没になつた部分が増えたので、これらを、また追加させました。

## チャプター4 「光を求めるべく、痛いしつ返しをへりひへり」

ある日、アルゼは自宅のパソコンを操作しながら、いきなり沈静化したザッパー・春雨のアンチヒューマンズへの攻撃について、考えていた。ディスプレイには、ザッパー・春雨が攻撃したアンチヒューマンズと関わりのある組織の名前が表示された。

（こないだ、ビンタしたからか…？それにしても、何故、こんなにも…、組織に攻撃する必要がある…？）

自分の前髪を分けていたピンを外しながら、アルゼはパソコンを消す。このあと、地獄同盟会での集まりがある。

だから、彼女はジャージのジャンパーを着て、部屋から出た。

「このクレージー・スカイホッパーは、アンチヒューマンズが開発していたファンタジースタースーツ…。それを、リアリティのザッパー・春雨は、アンチヒューマンズへの強襲の間に強奪…。そして、今…、エヌアル様の『ある計画』の遂行のために、アンチヒューマンズに見捨てられた…、俺達に渡された…」

昼下がりの爽やかな空気が漂う、アイスクリームショップの中で、容姿が素晴らしいビジュアル系なのに、わけのわからないレザーの革の服をペアで着ている若い男二人が、仲良く、アイスクリームを舐めていた。

そう…、ファンタジースタースーツ、『クレージー・スカイホッパー』を手に入れた元・スリーピングかつ、現在、謎のザッパー・春雨の動きに協力している、ケン・ホッパーと、鳥村辰の姿であった…。

ペチャクチャと、若い生娘のよづてアイスクリームを味わいながら、ケンと鳥村は語り合つ……。

「なるほど……、僕らが、今着ているのは……」

アイスクリームを口の周りに付かせながら、鳥村が話す。向かい合つ鳥村のアイスクリームに汚れた口を、手で拭き取りながら、ケンは微笑む……。

「俺たちを救つてくれた、夏海エヌアル様の……、ませこ……、『愛』そのもの……」

そう言いながら、ケンは鳥村の口を拭つた手を舐め始めた。

ペロペロ……、子犬のように、皿のアイスクリームで甘くなつた手を舐めるケン。

彼を見つめながら、鳥村は顔を赤くし……、

「まあ、ケンつたら……、いろんな人が見ている前で……、ダ・イ・タ・ンなのね……」

ヒドン引きじてこる店員たち、女子高生たちを見渡す。

「ふふっ……、ウブなんだね……、君は……」

ケンは鳥村の手を握る。

かつてのギラギラして、野望に燃える感じが、まったくなくなり、むしろ、変な方向へと直進し始めた二人……。

何故、アルゼ達とは別行動で、ザッパー・春雨は動いているのか……。何故、ケン、鳥村を利用しているのか……。

そして、エヌアルは、なにを狙つて、このように地獄同盟会とは、別の動きを進めているのか…？

果たして、『真・地獄同盟会』とは…？

ただわかるのは、この日のアイスクリームショップの売り上げと、店員のモチベーションは最悪だったことだ…。

## チャプター4 「光を求めるとい、痛いじつへ返しへへりついだ」（後書き）

登場人物解説：ザッパー・春雨。セブテンバーなどのニューキャラを登場させたため、予定していた展開に進むのが難しくなり、打開策のために生まれたキャラで、仮面ライダー二号が登場した理由をモチーフに作り上げました。実は、作品に出すまで本気で彼を主人公とした展開を考えました。性格は、ゼファー・ナと正反対にしようと思ったため、モデルはなし。おかげで悪い奴感が強くなり、よく解らないキャラになつたため、自分でも今後、どうなるか解らぬいキャラクター…。ただ、彼のおかげで、また展開を考え直すことになりました。

## チャプター5 「パロ・スペシャル」（前書き）

織部コルテ・桜花というヒロインが居ますが、轟編で書き切った感があり、彼女を今後、ゼファーナと絡ませるのが難しくなり、新しいヒロインが必要かなと考え、生まれました。鳥村から拉致された時点では、天然で、おしとやかなお姫様みたいな感じで書いてたけど、義父のセブテンバーをあんな風にしたため、お姫様キャラにならんだろうと思い変更、今のような性格に。性格は、仮面ライダー・カブトの主人公をモデルにして、冒険しました。ツンデレにならないように努力したいキャラです。

## チャプター5 「パロ・スペシャル」

『そりか…。ザッパーが無差別に攻撃を…。あいつは、少し気性が激しい…。しかし、根は優しい奴…。だから、仲間として認めてやつてくれないか』

携帯電話を片手に、アルゼは、うん！と頬笑みながら頷く。彼女は自宅のソファーに転がり、ザッパーから渡された、あのティベアを抱き抱える。

電話の相手は、アメリカに留学しながらも、地獄同盟会の全体を指揮している、彼女の兄、エヌアルだ…。受話部から聞こえる兄の優しい声に、アルゼは飼い主に撫でられている猫のような甘えた声を出す。普段、地獄同盟会のみんなには見せないよう表情と声で、携帯電話の先の兄に甘える。

とても、他人には見せられないような姿、表情であった。

『今後も、お前達には、戦つてもらひ…。状況は辛いが、全体的な視点からでは、かすかに、こちらに傾いて来ている…』

そう言われ、態度を改めて、アルゼはソファーから起き上がる。

今は、ケン・ホツパ脱走といい、ゼファーーナ春日から聞いた鳥型のファンタジースタースーツの件など、様々、動かなければならぬ状況だからだ…。

しかし、現実は、もつと違う形となっていたのを、アルゼは知らない…。

さらには、この異なった形を作り上げたのが、携帯電話の先にいる兄、エヌアルなのを…。

『ところで、あのティベア…。気に入ってくれたか？』

エヌアルはプレゼントの感想を求めるが、アルゼは、また表情を柔らかくして、両腕に抱えているティベアを見つめて、笑顔で、「うん！」と頷いた。その妹の無邪気な声に、エヌアルは、ふふ…、と笑いを口から漏らす。

## チャプター5 「パロ・スペシャル」（後書き）

セブテンバー・ミリア・変態の悪役って格好良くな?との勘違いから生まれてしまい、今の行き詰まりの原因となつたキャラ…。元々、悪役を書くのが苦手で、スリーピング編のケンみたいな解りやすい悪役しか書けないため、書いてて楽しい悪役を目指しました…。モデルは、アメリカのパロディ映画、最終絶叫計画シリーズの登場人物を意識した感じで。初めて書くタイプのキャラであるため、かなり頭を悩んでいます…。しかし、書いてて楽しかったりします…。

## 特別編 「ドキッ！リタイアだらけの大運動会」（前書き）

ケン・ホッパ、鳥村辰：スリーピング編では、何故か、ケンだけ特徴が作れず、解りやすい悪役なつてしまい、再登場時は、その反省を踏まえ、変態に…。ケリー、ケンは、仮面ライダー・カブトの地獄兄弟をモデルにし、地獄同盟会のライバルにさせました。鳥村は、モチーフの少年犯罪を意識し、その点を扱うのが重く難しかったため、しばらく出番はありませんでした…。なので、彼を普通のズル賢い少年に設定し直したら、意外と動かしやすくなり、今後の展開のために、ケンと一緒に変態化させました…。全体的にセブテンバー編は悪役を意識しております…。

## 特別編 「ドキッ！リタイアだらけの大運動会」

『熱血！地獄同盟会、秋のマラソン大会』

いつもは、剣道の練習などに使われる市内体育館内に、そう書かれた大きな看板が掲げられていた。

この日は、日頃、アンチヒューマンズと戦うせいか、私生活がだらけやすく、不規則、不摂生な彼らの体力を試すために、わざわざ、市内体育館を貸し切つてまで開かれた地獄同盟会のイベントであった。ちなみに、誰が主催したかは不明。

メンバーは、いつものアルゼ、カタナ、隼、ゼファーの四人に、ザッパー、ケン、鳥村が加わった7人。この7人でのマラソン対決である。

コースは、市内体育館前をスタートをし、市内一周をした後に、再び、市内体育館前まで、一番最初に到着した者が優勝となる。

なお、内容は普通のマラソン大会と同じ、自力で走つてゴールするのがルールであるが、彼らは、アンチヒューマンズと戦う戦士であるため、ファンタジースタースーツの着用を許された。

つまり、マラソン大会ではあるが、誰もが血の海になるのを予感した…。

改めて出場者を紹介すると同時に、彼らのこの大会に対する意気込みを紹介させて頂こう。

ゼツケン1番、『教習所の教官から、お前、速すぎると言われた暴走教習車』こと、夏海アルゼ。ファンタジースタースーツは、血液を超高熱にする爆裂ロマンティスト。普段は、クールな性格で、リー

ダーチャ格であるため、戦闘が少なく、なにかと引き合って描寫な  
多いため、優勝候補の一人とされている。今回のマリソンに賭ける  
意氣込みを聞いてみると…、

「ぶつっちゃけ、帰りたいです」

とのやる気に満ちたコメントであった。

ゼツケン2番、『俺の朝は、ハイオクストレートから始まる』こと  
秋羽隼。ファンタジースタースーツは、空間離脱と精密射撃のボニ  
ー・ポニック。普段、借金取りと、ゼファー・ナ春日に追われていため、  
かなり足腰が鍛えられているので、優勝候補の一人とされている。  
そんな彼の意氣込みは…、

「ザッパー、骨折れう！」

とのことであり、今回、彼のマネージャーとして控えている轟護  
は、何故か、彼の愛車、ZN-R1100の整備をしていたところ  
から、かなりのやる気を感じられる。

ゼツケン3番、『借りたDVDのパッケージの内容と中身が違つ  
ていたことに対して、レンタルビデオ屋にマジギレした危険なバイ  
オレンス侍』、冬風力タナ。ファンタジースタースーツは、超再生能力  
のサムライロジックと、高速に動くことの出来る謎の力、神速愛。  
身体能力が高いのに合わせ、思春期の少年と変わらない性欲を兼ね  
備えているため、優勝候補の一人とされている。そんな彼の意氣込  
みは…。

「週刊ブイボイの袋どじはハサミ入らずで親切だが、破れやす  
い」

とのコメントをした後、マネージャーの多摩雪乃に殴れた。

ゼッケン4、『右足に怪我してる人』と呼ばれている、ゼファー  
ナ春日。ファンタジースタースーツは、シュガーレス。今までの戦いに  
よつて負つた右足に怪我というハンデでの出場となるが、彼は…、

「怪我を理由にして、走らないわけにはいかない」

とのキャラに似合わないコメントをし、自宅アパートで、テレビ  
見ながら待機しているマネージャーの織部コルテからは、『マラソン  
の帰りに、ドアラの写真集を買ってきて』とのことだ。

ゼッケン5、『冷血非情の悪魔超人アシュラマンを彷彿させてい  
るかどうかは微妙』と呼ばれているザッパー・春雨。ファンタジス  
タースーツは、地面を掘り出すリアリティ。ビジュアル系な彼であり、  
手段を選ばない非情さから、優勝候補の一人とされている。ちなみに  
に、彼の態度が気に喰わなかつたので、意気込みは聞いていない。

ゼッケン6、7は、『東武東上線の地獄兄弟』と呼ばれている謎  
のコンビ、ケン・ホッパと鳥村辰。二人のファンタジースタースーツは、  
鎖を使うクレージー・スカイホッパー。様々な挫折と屈辱の果てに、  
辿り着いた境地の精神力から、優勝候補の一人とされている。そん  
な彼らの意気込みは…、

「優勝したら、俺達は俺達にじご褒美言ひ名の快樂を自らこびれる」

のことと/or>で、マネージャーのケリー・ホッパは変わり果てた弟の  
姿に涙が止まらない様子であった。

以上の7名により、このマラソン大会が開始される。様々な想いを胸に彼らは今、この瞬間に命を賭ける……。

そして、ついに火蓋は切られた……。

市内体育館前のスタートラインに、自分のファンタジースタースーツを纏う『5人』の戦士達が立つ。

なお、7人から5人と減ったのは、選手の1人であるゼファー・ナ春日選手が右足の怪我により出場を断念。同じく、選手の1人である秋羽隼は、なにを血迷ったのか、愛車ZZ-R1100でスタートラインに立とうとしたため、強制的に出場停止を言い渡された。スタートラインに立つ前から、2人もリタイアという苛酷さに、さすがに、残る選手達も言葉を失う。

だが、それでも選手達のマラソンへの熱意は冷める事なく、スタートの合図を待つばかりであった。

しかし、選手達を、さらなる試練が襲う。

なんと、いや、実行員がスタートの合図をしようとした瞬間、雨が降り出した。このポツポツ……と降りしきる小雨が、新たなアクシデントを引き起こす。

なんと、ゼッケン1番の夏海アルゼが、寒いから……と言つて出場を断念。同じく、雨に濡れるのが嫌だからと、ザッパー・春雨もリタイアを表明。

開始前から、半分以上がリタイアという近年稀に見る大アクシデントが発生。

これには、さすがに残る『2人』の選手達も驚きと不安を隠せずに入った。なお、冬風力タナは、観たいテレビがあるからと言つて、リタイアを表明した。

残るケン・ホッパ、鳥村辰でのマラソンを開始するはずであった

が、大事なパートナーと争うなんて出来ないわよ！と、何故か、おネエ口調で2人ともキレて、リタイアを表明。

ついに、出場者が0との近年稀に見る、まさに、事実は小説より奇なりと言わんばかりの驚愕のアクシデントが発生し、このマラソン大会は中止となつた。

こうして、多くの涙が流れた（主に、弟の変貌に泣くケリーの涙）感動的な若者達の熱くて激しいマラソン大会は幕を閉じた。  
たぶん、もう開かれることはない。

## 特別編 「ドキッ！リタイアだらけの大運動会」（後書き）

シリーズ解説・悪用者編は、『心の美しさと醜さ』がテーマに。今思えば、もうちょっと捻つて、1話完結の短編形式にすれば良かつた。スリーピング編は『自分の存在』をテーマに。ケン、鳥村を上手く書けなかつた点、桜花の出番を終わらせてしまつた感があり、反省点が多数…。現在のセブテンバー編は、『悪』をテーマにしています。あと、終盤への幕引きと、次回作への足掛かりに。組織の内部抗争などが難しいため、苦戦しています…。

## **特別編 「太陽は罪な奴」（前書き）**

この話は本編に載せましたが、内容的に本編から逸れるので、こちらに移動させました。。

## 特別編 「太陽は罪な奴」

それは夏の終わりと言わんばかりに、蒸し暑い夜だった。

コルテに支配された自宅アパートの前にて、寝袋での就寝に慣れきたゼファーーナが、すやすや…と、脇に眼鏡を置いて眠つていた。アパートの周辺は、明日は晴れだと言わんばかりに、田んぼから、多くのカエル達が叫んでいた。

しかし、そんなことを気にせずに、ゼファーーナは眠つていると…。

(おい…)

「ん…」

カエル達の鳴き声ではない、囁くような静かな声が、耳に入つてきた。

(おい…、ゼファーーナ春口だな…。シユガーレスとかいう…、この世界で、悪の組織と戦つているというガキは…?)

何者かの声が、夢と現実に挟まれているゼファーーナの耳に入った。聞き覚えのない男の声だ。

むにゅ むにゅ…、とヨダレの滴れる口を上下に動かしているが、目は閉じたまま、ゼファーーナは…、

「なに…? 新聞なら、間に合つてますが…? それとも…。ああ、うちには、テレビないですから…」

「どこからか、聞こえる男の声に寝ぼけて答える。  
すると…。

(ちょっと、来い…。『』の世界にも、影響が出るかも知れねえんだからな…)

男の声が、少し乱暴になつた瞬間、ゼファーナの目蓋が開いた。すると、寝袋の中のゼファーナの手が急激に、なにかの力によつて、引っ張られた。寝袋を裂いて、ゼファーナの左手が、勝手に動いて、自分の目の前に突き出された。

夢現つから覚めた、ゼファーナは、自分の左手が、見えないなにかに引っ張られているのに驚く。

「なんだ！？」

その力に逆らおうとしたゼファーナだったが、自分のその左手に、なにか、暖かい温もりを感じた…。それは、胸を刺すような切なく、悲しきもある懐かしい暖かさだ…。

「なに、『』の感覚…」

ゼファーナは、この力に逆らつのはやめた。見えないなにかに、左手を握られていることを、氣味悪く感じず、自然と身をゆだねるようにして、力を抜いた…。

すると…、カツ！と大きな光が、ゼファーナの目の前に広がつた。そして…。

「その日の朝…」

カルの鳴き声が、とつぐに途絶えた朝の爽やかな空氣。その朝の日差しが、アパートの窓に刺さる。

ベッドの上で、夢から目を覚まし、大きなあくびをしながら、な

にも着ていなままで毛布に包まれていたコルテが起き上がる。窓から来た朝の日差しが、彼女の顔に刺さる。

新しく買っておいた自分の下着を体に身につけ、その上から、ゼファーーナのシャツとズボンに着替えて、彼女は、部屋の掃除、朝食の準備をはじめた。傍若無人な彼女だが、部屋がきちんとしないのと、朝食を抜いて、一日を過ごすのを嫌っているため、めんどくさがらずに、ゼファーーナのアパートに住み着いてから、毎日こなしていた。

何故、ゼファーーナのアパートに住み着いているのかは、ともかく、彼女は部屋の掃除を開始しようとしたが…。

「ありやつ…」

アパートのドアを開けると、寝袋で眠っているはずのゼファーーナが消えていた。ドアの前には、寝袋と、彼の携帯電話と、眼鏡だけが落ちていた。

寝ぼけて、どこかの転がつて行つたのかと思いながら、彼女は、アパートの外をキョロキョロと見渡す。だが、どこにも彼の姿は見当たらない。

「こないだみたいに…、また消えたのか…。思春期だからか…」

やれやれ…、と言いながら、コルテは部屋の中に戻る。キッチンで鍋のお湯を沸かして、朝食の準備を始めた。

その日の午前中…。

商店街にある、ショッピングモールに設置されている映画館の前に、カタナは居た。いつもの着物姿に、腰に木刀を差したまま、口

ンビニのおにぎりを片手に、周囲をジロジロと見つめていた。

何故、カタナがこんな場所に居るかと言つと…。

あれは先日のことだ。市内体育館で、剣道の稽古していく、その稽古が終わった後、制服に着替えた雪乃から、いきなり映画のチケットを一枚渡された。

なにこれと、カタナは汗を拭きながら聞くと、雪乃是顔を真っ赤にして…。

「これは、わつ、私の友達が…、明日、彼氏と映画見に行くつもりだつたけど、急遽、行けなくなつたから、私にくれた映画のチケットよ…！」

彼女の手にあるのは、『劇場版、無事故無違反ライダー不動産王～これ、頑丈～』と書かれた映画の前売り券だった。なんだ、これと思いながら、カタナはチケットを彼女の手から取つた。

雪乃是顔を赤くしながら、チケットを眺めるカタナを見つめていた。

「べつ、別に、この映画を、見に行こう！とか、言つわけじやなくて…、せつかくくれたから、無駄にしちゃ、悪いなー、ってわけでも。しかも、一枚あるし…。べつ、別に、あんたなんかと映画を見たいとかじやなくて…」

口をガタガタに、文章をメチャクチャにしながら、雪乃が喋つてゐる。こいつ、こんなキャラだけと思いながら、カタナはなんと

なく、彼女が噛み噛みで言つてゐる言葉たちから、彼女の言いたいことの意味を読み取つた。

「つまり、この映画チケット一枚もらつたから、俺も一緒に来いと……」

「そり、そりよべつ、別に、あんたなんかと行きたいからじゃないからね……仕方なくよ……」

「そこまで言うなら……、大樹と行けよ……」

「ギヤース！――だから、そういうわけじゃなく……ウキーッ――！」

「なに、その日常じゃ、あまり聞かない叫び声……」

このやりとりが、小一時間続き、結局、カタナは雪乃と一緒に映画を見に行く事になつた。

なんで、一緒に来いの一言が言えんだと思いながら、カタナは待つていると、珍しく、かなりのオシャレをしてきた雪乃が現れた。まるで、ビニールのお姫様だと言わんばかりに、気合いの入った服装だった。

そして、二人は、このまま劇場内に入った。

(まさか……、カタナと一人つきりで、映画なんて……。最近、出番がなかつただけあるわ……)

そう雪乃是思つていた。真つ白で大きなスクリーンに映写機が光を当て始めた。

真つ暗になつた劇場内で、真つ赤になつた顔を、パンフレットで

隠すかのよつにして、椅子に座つてゐる雪乃が、隣の席のカタナをチラチラ見ていた。たまに、カタナと目が合つたりすると、心臓が弾けそうなくらいに、雪乃是ドキドキしていた。

だが、映画が始まると同時に、雪乃の目蓋が開いたり、閉じたりを繰り返しはじめる。

（あつ…、ヤバ…。昨日は、なんか、興奮して…、眠れなかつたら…。せつかくの、私のターンなのに…）

劇場が暗くなつたせいか、あるいは、夜眠つていなかつたせいか、そのまま、雪乃是目蓋を閉じて、眠つてしまつた。隣の席に寄り掛かるようにして、雪乃是崩れ、くー、くー、と寝息を立てた。

しかし、彼女が寄り掛かる席…。そこには、さつきまで、カタナが座つていた…、はずだつた…。

だが、空席になつていた…。雪乃が目蓋を閉じた瞬間、カタナの姿がなくなり、席には空白が…。

ジー、カタカタ…と、映写機は音を鳴らす…。

カタナが消えたことに気付かないまま、雪乃是スクリーンの光を浴び、夢の世界へ…。

同じ頃、強い日差しの太陽の下で、秋羽隼は一人、自宅アパートの前で、通販で購入したサンドバッグを、思いつきり、殴りつけていた。

「チクショウ！あのキザ野郎が！人の後頭部、叩きやがって！！チクショウが！！」

適当な木に釣り下げたサンドバッグを、以前、自分に不意討ちをしたザツパー・春雨の顔を投影しながら、ストレス解消と言わんばかりに、何度も何度も、パンチを浴びせていた。

ハアハア…、息を切らしながら、サンドバッグを殴つていると…。

バゴツ！

強く殴りつけたせいか、サンドバッグが反動で、かなり勢いをつけて、隼の顔面の方に戻ってきた。勢いのついたサンドバッグは、隼の頸に命中し、彼の意識を奪い去つた…。

隼は白眼を向いて、その場に倒れ込んだ…。

すると…。

(こいつ…、バカか…。まあいい…。これで、三人目…)

夜、ゼファーナの元で、聞こえた、あの男の声が、気を失う隼の耳に響いた。

すると…、カツ！と、激しい光が、氣絶した隼の身体を包んだ。

そして…、それから、しばらくした午後の昼下がり…。

炎天下の下、いつものジャージ姿のアルゼは、市内の商店街のオモチャ屋の前で、前屈みになつて落ち込んでいた。普段は、冷静沈着で、目立つことを嫌う彼女…。だが、今日に限つて、取り乱し、さらに、オモチャ屋に入る子ども達の視線の的になつていた。

アスファルトに手を置き、彼女は目から涙を流す。

彼女が居るオモチャ屋の扉に、ある貼り紙が貼られていた。貼り紙には…、

『本日発売の『歌つて踊れる！カエルのモニカちゃん』のぬいぐるみは売り切れました。限定発売ですので、次の入荷はありません』

と、書かれていた。

この文字を見て、涙を流すアルゼは、ダンシーと、アスファルトを何度も叩く。これを見た、子ども達が恐がって泣き始めた。

「こんなことなら、恥ずかしがらずに、予約すれば良かつた…」

ぬいぐるみを買えずに、アスファルトに伏せて泣く彼女…。それを、子ども達の目に入れないよう処置する母親達…。

しばらくすると…、サイレンを鳴らして、パトカーが現れた。

「なんて、失態だ…。我ながら、なんというキャラ崩壊…」

そのまま、留置所の個室に入れられたアルゼは体育座りで、落ち込んでいた。警察に捕まつたことに落ち込んでいるのではない、ぬいぐるみを買えなかつたことに落ち込んでいるのだ。

そのことに落ち込みながら、アルゼは体育座りのまま、頭を伏せ、予約しなかつた自分を憎んでいると…。

(これで、最後の一人…。おい、協力してもらひや…)

また、あの男の声が…。ゼファー、隼と現れ、次はアルゼの元に現れた。

だが…。

「つむぎこ、私に話し掛けるな…」

落ち込むアルゼは、声を無視した。

(『シービー』を倒すのに、味方が足りないんだ！だから、お前の仲間、ゼファー・ナ春日、冬風カタナ、秋羽隼に協力してもらつていい！もう奴らは、『シービー』の仲間たちと戦ってくれている！だから…)

アルゼは、この男の声に対しで、とうとう落ち込みすぎて、わけの解らない幻聴が聞こえるようになってしまったと思っていた。だから、黙り込んでいようと…。

すると…。

(まあ、いい…。)そのまま、お前を強引に連れていいく…)

体育座りをしているアルゼに、また、あのカツ！と大きな光が放たれた。  
そして…。

次々と、行方が不明になる地獄同盟会の4人に、謎の空白の時間が流れる…。

果たして、彼らは、どこに消えたのだろうか…。  
それを知るのは、あの声の主だけである…。

「はつー。」

気がつくと、アルゼの目の前に、警官たちの姿が現れた。キヨロキヨロと、アルゼは留置所を見渡す。釈放だと、警官が言っている。しかし、アルゼは状況が飲み込めないまま、立ち上がった。

「なんだ…、さっきのは…？確かに、私は…、あのカエルを倒して…」

なにか、ブツブツと言いながら、自分の両手を見つめながら、アルゼは、この状況を飲み込もうとして、周囲を見渡す。警官が、早く出ろと彼女に言い放つた。

「ん！痛っ！」

氣を失った隼が、起き上がった。氣付くと、顎に痛みが走る。目の前には、自分のアパートと、あの自分の顎に命中したサンドバッグが、布拉ブラと揺れていた…。あの太陽の下で…。

「なんか、変な夢見ちまつたな…」

起き上がって、隼は顎をノキノキと鳴らした。

「あたし、寝ちゃってたけど…」

カタナと雪乃是、映画が終わってから劇場から出てきた。眠っていたことを恥ながら、雪乃是、周囲をキヨロキヨロと見渡すカタナに話し掛けていた。

カタナは、映画の上映中、席から消えていたはずだったが…、今

は、雪乃と一緒に歩いていた。なにかを探すように、カタナは周囲を見ながら、歩いていた。

「どんな映画だった……？」

映画の内容について、雪乃が感想を聞くと……。

「なんか……俺も一緒に戦つていたみたいだ……」  
「？」

よく解らない感想を言うカタナ。

そんな彼を見て、雪乃是笑顔で、彼の腕に、自分の腕を絡ませた。

「あんた、意外と映画に、のめり込みやすいんだね……」

呆然としているカタナに、雪乃が笑つて言った。

数分前にゼファーナが消えたが、一応、朝食を、一人分で作り終えたコルテ。パンと、ハムエッグと、簡単な野菜スープがテーブルの上に並べられる。

突然、消えたゼファーナのことを気にしていたが、とりあえずは、朝食を食べておくかと、彼女がフォークを握った瞬間。

ガタツッ！！

いきなり、アパートの前で、大きな物音がした。彼女のフォークが驚きで、床に落ちた。

なんだと思いながら、アパートのドアを開けると……。そこには……。

「僕は…」

アパートの前には、さつき、消えたはずのゼファーナが涙を流し、横たわっている姿が…。メガネを外した、その、まだ少年の目からは大粒の涙が流し、眠っていた。

「鼻血君…」

彼女は、うわごとを言いながら、眠っているゼファーナを静かに見つめた。

何故、彼がさっきまで、アパートの前から消えていたのか…。何故、彼が急に姿が現したのか…。

そんなことを、コルテは考えなかつた。ただ、涙を流して眠る、ゼファーナの顔を静かに見つめていた。

「寝相、悪すぎ…。やっぱり、まだ、子どもだな…」

コルテは、横たわるゼファーナの体を背負い、ベッドの上まで運んだ。

彼の分の朝食に、サラランラップをかけた。そして、思い出したよう、コルテはアパートの前に落ちていた彼のメガネを拾い上げ、テーブルの上に置いた。

そして、コルテはテーブルに座り…、

「いただきます…」

手を合わせ、朝食を食べ始めた。

その日の夜、ザッパー・春雨を除く、地獄同盟会の4人…、ゼフアナ春日、冬風力タナ、秋羽隼、夏海アルゼが、久しぶりに、集合することになった。

場所は、お馴染みのファミレス。一つの席に、4人が座る。

「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」

ゼフアナにしても、カタナにしても、隼にしても、アルゼにしても、なにか言いたげな表情をしていた。

「」の日の集合は、珍しく、ゼフアナからの呼び掛けでの集合だ。

…。だから、第一声を切ったのは、ゼフアナだった。

「あの皆さん…」

なんだよ…、隼が顎を触りながら答える…、カタナは静かに腕を組み…、アルゼは自分の両手を握ったまま黙っている…。

それを見て…、

「なんか、皆さん、言いたいことがありますね…」

ゼフアナが言つと、みんなが頷く。

「じゃあ、一齊に、言いたいことを言こましょーつか…」

「のゼファーナの意見に、カタナ、隼、アルゼは同意して首を縊に振り、皆、一斉に口を開いた。

「なんか、変な夢見ました……」

「なんか、変な映画見た……」

「ザッパーがムカつく……」

「なんか、変な幻覚を見た……」

ファミレスの外は涼しくなり、今年の残暑ですり、過ぎ去りつとしていた……。

また、明日は晴れると言わんばかりに、田んぼのカエル達が鳴き声を上げて、唄を歌つていた。

## 特別編 「太陽は罪な奴」（後書き）

シユガーレス：一番最初に思いついたため、比較的にシンプル。動きが機敏で暗闇に潜むイメージ。武器については、肉弾戦での俊敏性を生かすため、コダチのような小型の剣に。余談ですが、スリーピング編で使用しなかったのは、この時期、世の中全体が刃物について考えるべきことがあつたため、ファイクションとはいえ、主人公が刃物を振り回すのは良くないと想い、一時自粛していました。同時に、スリーピングチームは素手が多かつたため、主人公が武器に頼るのはなあ…とも思いました。武器や凶器について考えるのも、今作のテーマです。

ポニー・ポニーック：連載開始時、隼のキャラ設定は遅れたが、バイク乗りタイプは最初から考えてたので、意外とスムーズに行つた。レーシング用のライダースーツのイメージ。武器は、バイクに乗りながらでも使えることから、オートマチックの拳銃。ちなみに、遠距離用のライフル、バズーカなども精密に使えるが、バイクに乗ることが第一なので、拳銃。余談ですが、このファンタジースターストと、名前があつてないような気がして不安で仕方ない…。名前の由来となつた曲のアーティスト様、ごめんなさい…。

形も、規模も、足跡も、目的も解らない謎の巨大武装組織、アンチヒューマンズ。

組織が持つ力とは、衣類などの纖維に、超小型のコンピュータを埋め込み、そのコンピュータの電気刺激により、肉体や、神経、頭脳を強化する。それにより、コンピュータが搭載された纖維の衣類を着衣するだけで、人体から未知の力を引き出すことに成功し、兵器としてのファンタジースターツの開発に成功した。

人間一人が、銃や、刀、あるいは、車などの機械を相手にするこの出来るレベルに、強化をするファンタジースターツは、裏社会に出回り、それから、徐々に社会の歯車が狂い始めた。

表沙汰になれば、確実に世界情勢が狂うファンタジースターツは、組織の下請けを行う裏の卸売り業、スリーピングのネットワークにより、金で捌かれ、数々の犯罪者に利用され始めた。

そして、組織も、裏で売り払ったファンタジースターツの利益により、密かに、巨大になっていくようになっていた。

だが、それに歯止めを掛けかのように現れた、ファンタジースターツを操る謎の青年達の集団、地獄同盟会により、組織の利益に影響が与えられ始めた。

これを、利益に害を与える集団として判断した、組織は、スリーピングにファンタジースターツを提供し、彼らの始末に動く。

スリーピングは、すぐに、裏社会に名前を売り出している四人の青年達を刺客として送り出した。

だが、結果は、無残にも、そのうちの三人が返り討ちとなつた。

刺客の一人目、元暴走族ヘッドの轟護は、絶対防護服の『ゴッド・

スピード・ゴー』を『えられ、空間離脱のファンタジースタースト、『ポニー・ポニック』を操る秋羽隼との戦いとなつた。

どちらも、拳銃使いであつたが、互いに、拳銃を無意味にする特性だつたため、オートバイによる、原始的なレースでの戦いとなり、結果、轟のバイクは、途中で大破。同時に、戦意を喪失。

運で決まつたような決着ではあるが、秋羽隼との戦いは、轟の敗北となつた。

続いては、殺し屋家系で育つたケリー・ホッパ。脚部の強力強化の『キヤンディ・キュティ』を与えた彼女は、組織から、監視をさせられていた奇襲タイプのファンタジースターストを駆逐してい、地獄同盟会の一人で、組織に正体が不明となつてゐる試作の黒い仮面のファンタジースターストと交戦。

結果は、ケリーの予測不可な戦闘スタイルと、黒い仮面のファンタジースターストの未知数から、互いに痛み分けの形になり、引き分け。

続いて、彼女が戦つたのは、地獄同盟会メンバーの中で、不死身の特性を持つ、『サムライロジック』の冬風カタナ。彼は、事の起因となつた一文字事件の際に、ほぼ単身で、多数の安価型ファンタジースターストを、相手にせずに蹴散らし、一文字クラブを終末させた男であり、不死身の特性もあり、桁違ひの戦闘力を持つてゐる。

そんな彼に、ケリーは策を弄したが、破られ、逆上。しかし、カタナは、サムライロジックの特性とは、別の力、『神速愛』により、キヤンディ・キュティを破壊。

結果、カタナの圧倒的な潜在能力により、ケリーは敗北した。

残りとなつた、謎の少年、鳥村辰。仲間の刺客達にも、危険視、または、嫌悪されていたせいか、あまり目立たなかつた。

それ故に、現在、唯一、残っている。

彼は、自らの血液を異常上昇させる特殊なタイプのファンタジスタスース、『爆裂ロマンティスト』を操る夏海アルゼを狙う素振りを見せていた。夏海アルゼも、その徹底した冷徹さと、爆裂ロマンティストの危険さゆえに、あまり、前に出ることはなかつた。

この二人が激突となれば、最悪の事態が予測される。

最後に、刺客の中でも、リーダーのような存在だったケン・ホップは、両腕、上半身を強化するタイプの『エターナリティ』を与えられた。

そして、姉のケリーと痛み分けとなつた、地獄同盟会メンバーからは、『シユガーレス』と呼ばれている、未知の部分が多いファンタジースタスースを操る少年、ゼファーナ春日と交戦。

ゼファーナ春日は、夏海アルゼの兄、エヌアルと入れ替わるように、シユガーレスを与えた。そのため、皆が組織からは顔が割られている中で、唯一、正体が割れてないため、ある意味、切り札のような存在だ。しかし、彼は、地獄同盟会メンバー中、最年少で、精神的、肉体的な未熟さから、暴走や境地に陥ることが多い。

そんな彼と、エターナリティの殺し屋家系のケンとの差は歴然ではあつた。だが、シユガーレスが謎の力を放ち、ゼファーナ春日が変貌、まさかの一撃必殺により、エターナリティの破壊。

結果、ケン・ホップは油断したとはいえ、ゼファーナ春日の強烈な一撃により、敗北。

以上が、スリーピングの刺客達の現状である。

鳥村辰以外の三人は、現在、地獄同盟会を支援しているライフコープレーションにより、拘束。

「ゴッド・スピード・ゴーのファンタジースターズは、現在、研究部により、預けられた。

スリーピングの戦力が削られてしまった今、地獄同盟会に対しても、アンチヒューマンズは、どう動くのか…？  
果たして、アンチヒューマンズ壊滅のために戦う、地獄同盟会のメンバー達の運命は…？

激化する戦いの中、誰よりも、強く組織を憎む秋羽隼。  
失った過去の記憶と、自分に想いを寄せる少女との今の狭間で生きる冬風カタナ。

冷徹の仮面で内面を隠し、姿を暗ませる兄に依存しながらも、不意に人間らしさを出す夏海アルゼ。

そして、漆黒の過去を、シユガーレスとしての自分の存在で搔き消しながらも、明日を生きていくゼファー・ナ春日。

彼ら、四人の戦いは、まだまだ続く。

サムライロジック：正直、反則的な不死身ですが、カタナの設定と、彼はメンバー中最強という位置づけにしたかったため、この能力に。時代劇の桃太郎侍、刀を持ったときのスティーブン・セガールみたいなイメージで。武器を木刀のしたのは、刀だと、雑魚キャラ達が悲惨なことになり、誰が敵だか解らなくなるし、さすがにパワーランスが崩れると思ったため。あと、彼の名がカタナなため、武器の刀と、台詞などで混乱と思った。特殊能力の神速愛は、仮面ライダー555、カブトの超高速移動に感動したことから。技名も、カブトの映画タイトルから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9780e/>

---

番外編 漆黒のシュガーレス ~熱血！地獄同盟会24時！！~

2010年10月28日06時48分発行